ある日、妖怪が見えるようになった。

注）この小説は作者の願望をそのまま書いています。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日、妖怪が見えるようになった。

【Ｎコード】
Ｎ０７３０ＢＡ

【作者名】
注）この小説は作者の願望をそのまま書いています。

【あらすじ】
アドバイス、感想いただけたら嬉しいです。
【あらすじ】
高校生、東雲悠太は普通の高校生であった。
普通に友達と遊び、普通に恋をして、普通にテストの点が悪く…
だけどある日妖怪が見えるようになり！？
／ドキッ！妖女だらけのうざカワストーリー！／

０１：キャラクター紹介

キャラクターが増えるごとに、編集します。

東雲悠太（しののめ ゆうた）
性別：男　年齢：１６歳高校２年
・ある日いきなり妖怪が見えるようになった
・姉と二人暮らし
・家事ができる
・アニメやゲームが好き。

東雲恵美（しののめ えみ）
性別：女　年齢：２１歳
・悠太の姉
・悠太が妖怪が見えることを知らない
・お酒大好き

座敷（ざしき）わらし
性別？：女　年齢：■■■歳
・悠太と恵美がすんでる家に憑いてる妖怪
・妖女
・古風
・通称「わらこ」

02：ある日、夜空を見ていたら。

ピンポーンと聞きなれた音が聞こえる。

「はいはーい。今開けるー」

「ゆーーーたーーーおさけーーー」

家に帰ってくるやいなや、第一声がこれか。

「酒って、もう酔っ払ってるじゃん。」

「よってるー？このあたしがよってるーー？またまたーーーご冗談をー」

そう言いながら、俺に抱きついてくる。

服の隙間から、見える。

「ちょっ！姉さん見えてる見えてる！」

「襲っても…良いんだよ？」

「襲わないよ！！良いから、寝てろって！」

「ゆーたがそう言うならしかたないなーーー。おねえちゃん、寝ちゃう！」

「はいはい…ちゃんと着替えろよ？」

「着替えさせて？」

「やらないから！」

「うー…ひっく。じゃぁおやすみのちゅー」

「しないから！」

「ぐすん。おねえちゃんは悲しいよ。昔のゆーたならしてたのに…」

「してないから！いいから寝て！」

「うー…ひっく。りょーかいしましたーーー！」

かわいらしく敬礼をして、自分の部屋に向かっていく。

ちなみに、俺は姉ちゃんと二人暮らし。

と、言ってもマンションだが…。

「ふー……今日も大変だったな。」

このごろのお気に入りは、オレンジジュースを飲みながら夜空を見ること。

夏の星は綺麗だ。

「もっとお上品な姉がよかった…。」

独り言をつぶやく。

当然、誰も返してくれない。

「ふむ。…確かにあの姉は酷い酒飲みじゃのう。」

「だよなー酒好きでよっぱらいじゃなかったら、可愛いのに。」

…ん？

俺の独り言は1人で言うから独り言であって

「うむ。私もそれは思うぞ。」

会話が成立してるってことは…

「だ、誰！？」

声がした方向を見ると、和服姿の小学生が居た。

「ん？私か？私は、座敷わらしじゃ。」

平然と言ってのけたその少女。

もとい妖女はこう続けた。

「あれ…何でお前私が見えるのじゃ？」

俺はある日、妖怪が見えるようになった。

０３：ある日、名前を付けたら

「うー…む。不思議じゃ…」

とか何とか言ってる妖女を俺は抱っこする。

軽い。

それも当たり前か…小学生だし。

「お家はどこかなー？」

「わ…！私の家はここじゃ！」

「はいはい。おままごとはかぞくとやろーねー。」

そう言って玄関まで運ぼうとしていると姉さんが出てきた。

「ゆーたーーー、水ぅーーーー」

「ちょっ！姉さん！水はいいからさ！この子供どうにかしてよ！」

俺はそういいながら、自称座敷わらしを姉さんに見せる。

「んーーー？ゆーた。誰もいないよーーー？」

「え？そんなはずは…だってここに」

俺はちゃんと抱っこしている。

困惑している俺の手の中で、自称座敷わらしがくすりと笑った。

「ふむ…。どうやらお前にしか見えない様じゃの。」

「なっ…！」

「……はっ！ゆーた…まさか」

「それは赤ちゃんぷれーがしたいってこと！？したいってこと！？お姉ちゃんとしたいの！？そうなの！？」

「違うから！！断じて違うから！！！」

「そう…。じゃぁお姉ちゃんとちゅーする？ちゅーしちゃう！？」

「しないから…！良いから水飲んで今日は寝て！」

俺は一旦座敷わらしを離し、コップに水を入れて渡す。

「ちぇっ！しかたないなーーーー！襲いたくなったらいつでも来てね――！」

「襲わないから！！」

◆

姉さんが部屋に帰った後、俺と自称座敷わらしはテーブルを挟んで座っている。

「これで私が妖怪だということを…しんじたであろう？」
「確かに…姉さんには見えてなかったけど…。」
「けど？なんじゃ？」
「どうして…俺だけ見えるんだ？」
「そんなもの知らぬ。」
「そうか…。お前…名前は？」
「座敷わらしじゃ。」
「いや…そうじゃなくて、名前。」
「だーかーら。座敷わらしじゃ。」
「なるほど…。名前…ないのか。」
「ふむ…まぁ、人間で言うところの名前はないな。」
「よし！じゃぁお前は座敷わらしだから…」
座敷わらしの子供…
座敷わらしの子供……
！

「よしっ！名前はわら子だ！！」

一瞬、沈黙の後。

わら子が口を開いた。

「いやじゃいやじゃ！！もっと可愛いのが！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0730ba/

ある日、妖怪が見えるようになった。

2012年1月6日11時46分発行